

そのことがしみじみとわかるのは、歳を重ねてからである。現在の私は、偉い方々から、高名な美食の店での会食に誘っていただく機会もある。だが、そのようなことと比べものにならないほどに楽しく、**大きな幸福感を感じるのは**、自分たちの子供の家族に誘われて、孫たちとも一緒に近所のファミリーレストランなどに行くことである。それが、この歳まで生きてきた私の、まごうことなき魂の実感なのである。

だが、子供をもうけるには、こと女性は身体的な年限もある。別に恋愛結婚に非を唱えるものではないが、いつ来るとも知れぬ「運命の人」を待ち続けて機会を逸するのは、取り返しのつかぬ悲劇以外の何ものでもない。**孫を見るという「腹の底からの幸せ」**を味わうためにも、何らかの方法で結婚を奨めるのに躊躇をすべきではないだろう。

もちろん、それはジジババになる自分のためだけではない。子供を持ち、**孫を持つという人生最大の幸福**を、わが子に味わってもらうためにも、時を失することなく結婚を奨めるしかないのである。

順太先生は、猟犬の話をしてくれたあとに、結婚の話がされた。「**結婚をするときには、兄弟姉妹を見ろ**」というのである。

今のご時世であれば、結婚を猟犬と比べるなど、随分乱暴な話だとされかねない。だが、私はその教えを守った。というのも、知的生活を送るためには、配偶者の選択が決定的だと考えていたからであった。

当時は見合いで結婚するのが普通だったから、私は見合いで結婚をした。何人か見合いをして、断られた人もいるし、断った人もいる。私が気に入ったのは今の家内だった。幾度か会ってから結婚することを決めた。

その間に彼女の兄弟と会うことができた。家内には三人の兄弟がいて、三人とも東京の難しい高校を出て、大学は全員早稲田だった。何よりも目を引いたのは、三人とも体格がとてもよかったことだ。

「これは順太先生の物差しに合うなあ」と思いながら会っているうちに、だんだん好きになって結婚しようということになった。

結婚というのは非常に大きな博打だ。けれども、兄弟がみなしっかりしている相手と結婚する場合は間違いが少ない博打になる。

蒲柳ほりゅうの質

か弱い体質、体質が弱いこと。

アダム イブ (エバ)

私は喜寿になる七十七歳のときに二億円を超える借金をして、現在の家を建てた。巨大な書庫をつくって自分の全蔵書を書棚に飾り、全蔵書と対面してから死にたいと願ったからである。家内が、それまで住んでいた家について「本権はあるが人権はない」とこぼした話は第二章で紹介したとおりだが、新しい家はピアノを二台置ける応接室もつくったことで、ようやく人権も保証されることになった。

普通は、その歳では銀行もなかなかお金を貸してくれないだろうが、土地があったので、それが担保となった。幸運なことに、私の若いころは高度成長の時代であった。だから結婚後、すぐにローンを組んで、土地を買い、家を建てることもできた。毎年毎年、日本の経済が成長して給料も上がるので、ローンもわりと早く返済できる。そうして求めた土地が担保となったのだから、ありがたいことである。

また、現役時代ほどではないが退職後も収入があったし、借金に見合うだけの貯金もあった。だから、私に万が一のことがあって借金が返せなくなったとしても貯金で返せば、妻が家を取り上げることもないだろうと思っていた。

定年後の気分を左右しているのは、収入の有無であろう。ささやかであっても、定年後に収入がある人は随分と違う。

収入がない人は必ずケチになる。それは昔の女の人を考えればよくわかる。昔の女の方は、ケチと相場が決まっていた。収入がなかったから当たり前だ。飲み食いしても男が出すものだった。ところが今の女性は働いている人も多くて、お金の使いっぷりがよい。よほど男性よりも思い切りがよいのではなからうか。

歳をとって遊び回っているのも女性が多い。年金があつてお金を持っているし、お金の使い方も遊び方も知っている。遊ぶ相手にもことかかない。一方、男のほうは、企業年金をもらえる人でも、定年前と比べると収入が減るからお金を使わなくなる。ことに会社の接待費ばかり使っていた人などは、定年を過ぎると、とたんにケチ臭くなるようである。

少しでも収入があれば、気分が慎ましくなりすぎないで済む。「慎ましく、慎ましく」という気分にならないようにするために、お小遣い稼ぎ程度でいいので、何か仕事をするのがいいと思う。

病気をしたときに、いかに心の持ちようが重要かを痛感させられたのは、私が七十七歳前後のときに足の骨を折ってしまったときのことであった。家で階段から落ちてしまったのだが、足の骨を折ってしまったために、ギプスで固定し、松葉杖で歩かなければいけなくなった。これは不便きわまりない。棚の本を取るにも、トイレに行くにも、何をするにつけても大いに苦勞をした。当然、生活にも随分支障が出るので、ついつい「チクショウ」と思ってイライラしていた。

すると、そんな心持ちでいたから、免疫も落ちてしまったのだろう。带状疱疹になってしまったのである。

带状疱疹は、子供のころに罹った水疱瘡のウィルスが、老齡やストレスなどが原因で免疫

力が落ちると再び暴れだし、発疹と鋭い痛みを伴う病気である。首より下に帯状疱疹が出るのは痛さを我慢すれば済むが、首より上に帯状疱疹が出ると危険な状態になることもあるようだ。私の場合は**頭に帯状疱疹が出て、顔がひん曲がってしまった**。

私の曲がった顔を見たある出版社の社長が、「普通の病院ではダメです」といって、治療できる病院にわざわざ車で連れていってくれた。その病院で西洋的な治療法と鍼治療を併用する治療を受けて、ようやく顔はもとに戻ったのだが、かすかに歪みは残った。その歪みも石原結實先生の奥さま（美容が専門だとうかがった）が温めて操むという方法で、きれいに治して下さった。

足の骨折自体は、幸いにして折れた場所が真ん中付近だったのでよくくっついた。帯状疱疹そのものも完全に回復した。ただ、神経のバランスが悪くなったのか、それ以降、身体のバランスを崩すことが多くなった。

真向法（まっこうほう）の基本は四つの動作のみなので、概略を紹介しておこう。

(1) 床にお尻をつけてあぐらのように膝を曲げて座るが、ただし両足の裏を合わせ、できるだけ膝を床につけ、背筋をまっすぐにする。そのまま上体の前屈と起き上がりを繰り返す。

(2) 両脚をまっすぐ伸ばして座り（足首はできるだけ鋭角に立てる）、上体の前屈を繰り返す。

(3) 両脚を左右にできるだけ開き（一三〇度～一五〇度の角度をめざす。足首はできるだけ鋭角に立てる）、上体の前屈と起き上がりを繰り返す。

(4) 正座をしてから脚を少し外に広げてお尻を床につける。その態勢から上体を後ろに倒して寝て、さらに両手を伸ばす。

毎日、

グッ、グッと小刻みに少しずつ押し込むように心がけてやっていく（ただし無理をしてはいけない）と、徐々に曲がるようになってくるので嬉しくなる。

七十歳のころには、かなり身体が柔らかくなり、「股割」をして、あごが床につくくらいに身体が曲がるようになった。加齢によって身体が硬くなるという常識を打ち破れるのだから、はまり込むと痛快きわまりない。

広島にも、原爆投下の三カ月後くらいから人が戻ってきて住んでいる。広島は世界で最初に原爆が落とされた地であり、被爆者にどういう影響があるかは、世界中の関心事だった。被爆者に関しての国際的な研究が進められて、データが出ている。それによれば、原爆投下直後に亡くなった人の多くは焼死か爆風によるものであった。放射線で白血病になり亡くなった人もいたが、被爆者全体から見ればかぎられた数であった。**被爆して生き残った人を長**

期間にわたって調査してみると、平均寿命は普通の人よりも長いくらいだった。遺伝的影響はほとんど見られず、奇形児の誕生も通例と比べて特筆すべきものではなかった。

広島放射線の強さは福島とは比較にならない。それだけ強い放射線でも健康への影響は限定的であった。

このような研究結果が出ているにもかかわらず、福島では放射線医学の専門家の意見が無視されて、主に政治家の思惑で必要以上の除染が行なわれてしまった。

一方、幸いなことに、私は文科系の研究者であった。文科系の研究者の場合、歳をとってもずっと研究を続けられることが多い。文科系は「蓄積」なのだ。歴史にせよ、文学にせよ、**進化する余地の少ない**普遍的なものを研究していれば、学べば学ぶほど知見は蓄積していく。だから、そうそう若い研究者には負けないで済む。もちろん、新史料の発見などでガラリと見方が変わることがないわけではないが、それすらも目端の利く人であれば十分に対応することができるだろう。

私は、歳をとってから「文科系でよかった」としみじみと感じた。退職金をもらってから二十年を超えたが、その間、まったく退屈ではなかった。本を読む時間が増え、考える時間も在職時代よりかえって増えた。

様々な読書や勉強を通じて、教養を高めることが大切なことはいまでもない。だが、それ以上に大事なものは、人としていかに生きるかという心構え、覚悟を知ることではなかろうか。

そのために必要なのが「**修養**」であり、「人間学」なのである。

そしてそれは、歳を重ねてからもますます大切になってくる。「修養」は不滅である。人間学を学んで修養を積んでいる人は、いつまでも衰えない。

理科系の人でも、ある程度の歳になって以降、「人間学」に目を向ける人もいる。理科系の知識を背景にして人間学を学んでいる人は、人間としての幅が広い。岡潔先生のように、数学者でありながら、人間学を極め、晩年は最も影響力のある老人の一人になった人もいる。理科系の人ほど、壮年になったら「修養」に心を向けるのが正解ではなかろうか。